

特集

スピリチュアリティと病院

「スピリチュアリティ」というテーマについて、本誌が特集を組むのは初めてのことであり、ある意味では時代の変化をよく示す特集テーマといえるかもしれない。

「スピリチュアリティ」という言葉あるいはコンセプトは、WHO が「健康」の定義における重要な要素として検討を進めたことや、終末期ケアへの関心の高まり等といった背景から、近年では医療関連の学会や文献等においては、(分野による違いがあるものの) 一定以上に広く使われるようになっていく。他方で、スピリチュアリティという言葉に対する“定訳”がなお確立しておらず、この言葉が片仮名表記のままで使われていることにも端的に示されているように、“輸入用語”にありがちなある種の座りの悪さやぎこちなさといった印象を、なお感じている人も少なくないと思われる。

そうした課題をもった「スピリチュアリティ」という言葉をどのように解釈し受け止めるかは、最終的には各個人の価値観や関心に委ねられるものであるが、筆者の視点からみて次の点は重要なこととして確認しておきたい。第一に、日本の土壤に根ざした「スピリチュアリティ」の再定義・再構築の必要性という点である。いうまでもなく、スピリチュアリティという言葉は(少なくとも現在の使われ方の文脈では)キリスト教的な背景を色濃く持つものであり、こうしたことや、戦後の日本社会がひたすら「物質的な富の拡大」という方向に邁進し、伝統的な文化を忘却していったことも手伝って、アメリカやヨーロッパにおけるスピリチュアリティ概念を直輸入したような議論も少なくない。しかしながら、実際には、“八百万の神々”といった表現や感覚にも示されているように、日本人は様々な自然の中に「スピリチュアル」な何かを感じとるなど固有の死生観や生命観を育み形成してきた。こうした点を含め、日本の伝統や文化をしっかりと踏まえたいうでのスピリチュアリティへの関わりが求められていると思われる。第二に、「時代」の認識との関わりである。上記のこととも関連するが、戦後の高度成長期においては、経済成長ないし、物質的な豊かさの拡大ということが国を挙げての目標となり、スピリチュアリティといったことは人々の関心の中心からはずれていった。けれども、現在のように物質的な豊かさの飽和する時代には、スピリチュアリティといった「目に見えないもの」への関心が高まっており、このことは、筆者の場合では例えば大学で日々学生に接している中でも感じられることである。スピリチュアリティへの関心の高まりの背景には、こうした大きな時代の構造変化があると思われる。

医療という分野は、こうしたスピリチュアリティへの関心と日常とがストレートに交差する場であり、患者ニーズを踏まえた新たな試みがいま大きく求められているのではないだろうか。

(広井 良典)